

ジョルジュ・バタイユと媒介の思想（２）：贈与と 道徳をめぐって

著者	酒井 健
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	82
ページ	33-47
発行年	2021-03-15
URL	http://doi.org/10.15002/00024068

ジョルジュ・バタイユと媒介の思想 (2)

——贈与と道徳をめぐって

酒 井 健

1. バタイユとメディアの問題

バタイユは1938年1月22日開催の「社会学研究会」の講演で「メディアを介する」(médiatiser)という言葉を用いて人間関係をこう説明している。

「人間相互の牽引力は直接的ではありません。メディアを介しているのです。この言葉の正確な意味でまさにそうなのです。つまり二人の人間のあいだの関係は、この二人が中心核の影響下に置かれているために、根源的に変質を被るということなのです。両者の実存はこの中心核のまわりを動いているのですが、この核の本質的に恐ろしい内実が、両者の関係に、避けがたい媒介として介入してくるのです」(「社会学研究会」, 1938年1月22日のバタイユの講演より、強調はバタイユ)⁽¹⁾

この場合、メディアは「中心核」(le noyau central)と言い換えられていて、男女の交わりでは性器が、中世以来の古い村では教会堂内の聖遺物がバタイユの念頭にある。もちろん広い意味でメディアは芸術作品や文字媒体、報道メディア、日常の会話の言葉なども考えに入れていいだろう。ただし、たとえそうした場合でもバタイユにとって重要だったのは、このメディアのおかげでそれに関係した人間が「根源的に変質を被る」(les rapports de deux hommes sont profondément altérés) ことなのだ。「この核の本質的に恐ろしい内実」(le contenu essentiellement terrifiant du noyau) とバタイユが述べていることにも同様に留意すべきである。

つまりバタイユは、人間関係のメディアとして認識される媒介物に何らか強い力が潜んでいて、それが影響を与えていると考えている。この力の所在に関しては、続く1938年2月5日開催の講演の冒頭でこう補足されている。すでに何度か他の拙稿で引用した文章だが、確認のためもう一度紹介しておきたい。

「人間相互の結合は直接的ではありません。つまりこの結合はたいへん奇妙な現実の周囲で、あるいはなにものにも比較できない執拗な力の周囲で、なされます。もしも人間関係がこの媒介を、こ

の暴力的な沈黙の核を、経ないのでしたら、その人間関係は人間の特性を喪失してしまうでしょう」(「社会学研究会」, 1938年2月5日のバタイユの講演より)⁽²⁾

ここで語られる「なにものにも比較できない執拗な力」(une force obsédante incomparable), 「暴力的な沈黙」(violent silence) がメディアたる「中心核」の「恐ろしい内実」である。人と人のあいだに、あるいは人と外部の世界とのあいだに存する力、目には見えずとも存在が実感されるこの力をバタイユは体験の対象として特化していった。このような力の発生を、媒介物という物に依存した現象ではなく、内的世界の境界領域の現象として、つまり心的な媒介領域として体験し、考察を深めていったのである。とりわけ1939年9月の第2次世界大戦の勃発で「社会学研究会」が消滅してからのバタイユはそうだった。バタイユは、彼一人の身で、よりいっそうこの力の場へ関心を差し向けていくのである。その途上の1943年に彼は『内的体験』を上梓した。彼に言わせれば、この著作の第2部「刑苦」は。内的体験の内実とそれをめぐる考察の「頂点」であり、最重要の記述となるが⁽³⁾、1944年発表の『有罪者』, 1945年発表の『ニーチェについて』においても、内的体験の深みを追求するバタイユが前面で主題化されている。

今回の拙稿ではこうした内的世界の限界に開かれた媒介領域と贈与の関係を考察していきたい。バタイユにおいて贈与の問題が、彼言うところの内的体験の「極限」とどのように対応しているのか見ていきたいのだ。

2. 贈 与

贈与もまた人と人のあいだで生じる出来事である。さらに信仰の分野では、人と外部の世界（たとえば自然界、特に太陽）とのあいだにお供えや捧げ物としてよく見出せる現象だ。

他方で、贈与を体験として見た場合、外的体験の次元（物のやりとりのように目に見える行為の次元）と内的体験の次元（人間の内面つまり心理の次元）に分けることができる。

この内的と外的の区別の視点に立って、まず等価交換から考えていこう。

今、100円硬貨を出して一個100円の値の付いたリングを果実商から買うとする。この場合、外的体験として100円玉とリング一個の交換が見られる。しかし内的体験として目立ったことは何も生じていない。買った側も売った側も、この交換自体がスムーズに行ったとき、これに関して内的な次元で大きな変化は生じない。買えてよかった、売れてよかったと思うかもしれないが、これは、この等価の交換とは直接関係のない特殊な事情による。買い手がなかなかリングを買えなかった経緯とか、その日リングがまったく売れていなかったという売り手の事情とかである。

100円のリングに対してあえて200円出すのが贈与である。他方で、100円出した買い手にリング2個を与えるのも贈与である。前者の場合では売り手は思わぬ儲けに嬉しくなるかもしれないし、後者の場合では買い手はリングが多く手に入って感謝の気持ちを覚えるかもしれない。もちろんこれとは違う

感情も多々生じうる。

ともかくも重要なのは、等価交換の場合と違って、贈与の場合、内的な次元で、良くも悪くも、何らかの変化が生じることなのだ。バタイユが特に問題にするのは、この変化が根源的な「変質」(altération)にまで達する贈与である。「変質」とは彼の用語であり、他なるものへ変わること、「異質化」(hétérogénéisation)と同義であるが、通常の合理的な社会生活には適合しない変化を指す。この「変質」が内的体験として贈与者と受贈者の心理に生じる事態にバタイユは特に関心を示した。そしてこの事態こそ、拙稿でこれからメディア空間として注目していきたい主題なのである。贈与者と受贈者の心の境界で出現する交わり、心理的なやりとり、それ繰り広げられる空間のことである。

バタイユが贈与の問題を直接に語り出すのは1933年発表の論考「消費の概念」に遡る。フランス社会学の確立者マルセル・モース(1872-1950)の「贈与論」(1923-1924)に触発されてのことだ。以下にバタイユの要点把握を引用しておく。ここから彼自身の関心のありかを探ることができるからである。

「物々交換という人為的な概念と対立させるかたちで、マルセル・モースは、交換の古風な(アルカイックな)形態をポトラッチの名称の下に確定した。この名称は、アメリカ北西部のインディアンからの借用語なのだが、じっさい彼らインディアンはポトラッチの最も注目すべき形式を提供してくれた。[……]一般的にポトラッチは、膨大な財の贈与からなる。相手を侮辱し、挑発し、矯正する目的で財が誇示的に贈られるのだ。この場合、贈与の交換価値は次のような事情から生じる。すなわち受贈者が、侮辱を拭い消し、挑発を受けてたつために、贈与を受け取ったときに同意された義務、つまり後にさらに膨大な量の贈与によって返礼する、つまり高利子付きで返すという義務に応えねばならないという事情である」(バタイユ「消費の概念」)⁽⁴⁾

「ポトラッチの制度が意義深い価値を持つのは、損失によってポジティブな特性が形成されるからなのだ—この損失から気高さ、名誉、階級制度における地位が生じるのである。贈与は、損失として、つまり部分的な破壊として、考察されるべきなのである」(バタイユ、前掲書)⁽⁵⁾

ポトラッチは北米インディアンの諸部族に見られる贈与の儀礼である。部族集団AとBがあったとしよう。Aがまず高価な所有物をこれみよがしに大量にBに贈与したとする。その目的はAの「気高さ、名誉」という内的な、心理上の価値であり、それに発して向上したA(あるいはAの首長)の社会的な地位である。Aにおけるこの上昇的变化は同時にBにおいては下降的变化つまり「屈辱」になる。そこでBはこの贈与を上回る贈与をAに返して、新たに「気高さ、名誉」を得ていく。そしてまたAがこれよりさらに豪勢にBに再贈与する。このような対抗的な贈与がポトラッチである。

バタイユがこれに関心を寄せたのは、贈与者の外的な次元の変化すなわち大切な所有物の喪失が、贈与者と受贈者の双方に内的な次元の変化をもたらすことにある。もっと正確に言うと、生産性を重視す

る近代社会ではありえないような財の運用がなされていること、つまり「気高さ、名誉」といった生産性の促進に直接役立たない、むしろこれに逆行する非生産的な心理的価値に向けて大切な物的財が放出されていることにある。

バタイユがポトラッチをして「交換の古風な形態」と形容しているのは、このような非近代性にある。近代社会における等価価値の交換では、内的な次元で波風が立たず、スムーズに金銭と物品のやり取りが行われるし、それを支えるために道德と法も確立されている。この等価価値の交換を促進させて近代人は何を目指しているのだろうか。端的に言って、生き延びるということ、未来に向けて生活を維持していくことである。近代先進諸国における平均寿命の上昇がこのことを証している。もちろんこの交換のシステムに巧みに利潤を上乗せして、金銭なり、物品なりを生活に必要な量以上に得ていき、その余剰をこれみよがしに浪費する近代人もいる。しかし近代の道德観では、そのような誇示は推奨されていないし、成金趣味だと軽蔑されたりもする。多くの近代人はむしろ余剰を蓄積して将来の安寧に備えるし、事業主ならば事業の存続と拡大のために余剰を有効に投資していくのが常態だ。

この近代人の生活で蔑ろにされているのは、内的次元の変化、いやそもそも、内的世界それ自体の存在である。精神とか心と呼ばれるものが忘れ去られ、個人がまるで物のように、あるいは道具のようになって、おとなしく交換のシステムに組み込まれているのである。生存の延命に役に立つという有用性が重視されているために、精神の無用な発露が軽視されているのだ。この無用な発露こそ人間の根本的な自律性があるかもしれないのに、である。バタイユがこの「消費の概念」を執筆した動機がそこにある。有用性への信仰を捉え直せ。役に立つことを次から次に追い求めずに、役に立つことを役に立たないことへ開いて、精神の疎外を克服すべきではないのか、と問題提起しているのである⁽⁶⁾。

3. ポトラッチの内的次元

ポトラッチに戻って、そのやりとりが、バタイユの極めた内的世界の限界状況とどう結びつくのか考えてみたい。

まず A と B の集団のあいだで内的次元でのやりとりがあったことを今一度確認しておこう。A が B に与える贈与は膨大であり、場合によっては A 自体の存続を脅かすほどになる。内的次元で A の成員は、部族にとって大切なものをあまりに多く失って存亡の危機、死の不安を感じることもさえある。しかし同時に、贈与が常軌を逸していて、この危機感が増せば増すほど、B の存在の否定も進み、A はよりいっそう「気高さ、名誉心」を享受するようになる。ネガティブな感情とポジティブな感情が激しい落差のなかで表裏一体につながっているのだ。この心理状態自体、矛盾していて不安定なのだが、しかしこの危険な贈与によって社会的な地位を確保したという思いによって、精神の不安定はある程度解消されるかもしれない。北米インディアン社会全体での A のランクづけ、この外的な価値が支えになって、部族内部の心理的動揺が鎮まることもありうる。そして A の内面的な「気高さ、名誉」が外面的な社会的地位によって固定され、物のように実体化し讃えられたりするかもしれない。そうして信仰の対象

になり始めるということも大いにありうることだ。贈与の記念碑だとか贈与を指揮した首長の像が造られたりすれば、なおのこと実体化は進む。だがこの栄光も束の間でしかない。B がさらなる贈与を行えば、A の社会的地位は凋落し、固定した「気高さ、名誉」は滑稽に見えてきて、笑い草になる。そうして A は屈辱のどん底へ沈んでいく。

じつはこの二つの集団の間に生じる栄光と笑いのやりとりが、バタイユの、表向き孤独な内的体験において意識のドラマとして繰り上げられるのである。死の危機を前にした不安、その不安を上回るエネルギーの燃焼、この燃焼による輝かしい権威。この権威はしかし固定化し滑稽になるやいなや笑い飛ばされて、精神は失墜に見舞われる。そしてまた新たなエネルギーの噴出を待つ。おおよそこのような精神の有為転変がバタイユの内的体験では繰り上げられる。

では、この内的事態とメディアはどのような関係にあるのだろうか。本項の冒頭で引用したバタイユのメディアに対する考え方との関係はどうなっているのか。

ポトラッチにおいては、二つの集団のあいだで繰り上げられる精神的なやり取りがそのまま、バタイユの言うメディアの空間になっている。二つの存在をつなぐ「中心核」、恐ろしい力場になっているのだ。バタイユの内的体験においては、彼の意識が、その存亡の内的限界状態で、分裂し、相克を繰り広げる。意識の主体自身が割れて同一性を保てなくなっている。理性と感情、合理と不合理、生産と消費、未来への思いと現在時への埋没など、正反対の心のあり方、相容れない精神の要素が闘争しつつ、つながりを得ていくのである。内的体験の境界域は、相反するものがつながるメディア空間なのだ。

「対立するものの一致」(identité des contraires) というテーマを媒介の視点から捉え直す試みは別の拙稿で行ったが⁽⁷⁾、このテーマは古くからニコラウス・クザーヌス(1401-1464)などの神秘家やヘーゲルなどの近代の哲学者、さらに20世紀にはシュルレアリスムの主導者アンドレ・ブルトンによっても唱えられてきた。バタイユの内的体験は、その系譜にありつつ、新たな問題を投げかけている。その一つが、対立するもの、矛盾するものに対する道徳の問題である。これは良い、これは悪いという価値判断の問題と言い換えてもいい。贈与に立ち返って、この点を検討してみよう。不純な贈与を贈与の墮落として批判すべきなのかどうかという問題に関係してくる。真なる贈与と偽なる贈与、つまり真偽の問題へも波及する。

先走って言うってしまうと、バタイユは大きな視点に立って、なおかつ内的視点にも立って、この不純さを考えている。不純さを批判する一方で、これを肯定するバタイユがいる。この不純を彼自身犯して、西欧の延命、世界の存続を模索する姿を我々は見出すのだが、しかし同時に、真理と虚偽、正義と欺瞞の双方を肯定するバタイユの広い倫理観に出会うことになる。こうした錯綜した彼の思想を以下で少しでも解きほぐしてみたい。

4. 不純な贈与

1949年出版の『呪われた部分・全般経済学試論・蕩尽』(以下『蕩尽』と略記する)でもバタイユは

モースの「贈与論」に注目してポトラッチに多くのページを割いている。第2部第2章はすべてポトラッチをめぐる考察だ。その中の「第8節《ポトラッチ》の理論(5):曖昧さと矛盾」では、社会的地位の獲得のために贈与が使われる点を取り上げられている。贈与として不純なのだが、バタイユの批判は単純ではない。問題の背後に回って、考察を展開している。

その考察に入る前に知っておくべきことが二つある。まず一点目は、1933年の「消費の概念」と違って1949年の『蕩尽』は地球規模のエネルギーの過剰という視点に立っていることだ。太陽エネルギーを恒常的に享受するこの地表全般のエネルギーの豊饒を前提にしてバタイユは議論を進めているのである。太陽からのエネルギーの豊饒な贈与を受け続けるなかで人間が引き受けねばならない限界を確認し、新たな対処の仕方を模索するというのがこの1949年の著作の基本テーマなのだ。つまり地表に生きる人間は「死すべき存在」であり、太陽のように際限のないエネルギーの消費に向かうことができない。消費を抑えて生産と蓄積に励んでいかねば人間の延命はかなわない。しかし生産と蓄積ばかりに向かっていると、地表のエネルギーの絶えざる過剰のゆえに生産物はいつしか延命に必要なレベルを超えて余剰をきたすようになる。その余剰の捌け口が重要な課題であるのに、人類、とりわけ近代の人間は、生産性を上げることばかり考えて、世界大戦という大規模な惨事を引き起こしてしまった。地球規模の全般経済の視点を欠いていたために、無自覚で不幸極まりない余剰の捌け口を自らに招来させてきた。2度の世界大戦を生きたバタイユは第3次世界大戦の勃発を危惧し、世界規模の新たな財の消費的運用を提言する。第2次世界大戦で財を消耗し尽くしたヨーロッパの復興のためのアメリカによる無償の経済援助計画、いわゆるマーシャル・プランはその一つとして肯定的に紹介されている。バタイユはいわば西欧の延命、人類の存続を考えているのだ。西欧の生活水準の向上をもたらすとしてマーシャル・プランに期待しているのである。

これは贈与のエゴイスティックな活用なのではあるまいか。地球規模と言って視野を広げながら、結局は太陽の純粋な消費を前に西欧という特定地域、大きく見ても地球という単体のエゴが際立つ提言なのではあるまいか。消費を生産力の復活のために利用するというのではあるまいか。贈与によって地位保全をはかる北米インディアンの部族と同じ欺瞞を犯しているのではあるまいか。全般経済学の問題として、こうした批判が見えてくる。

もう一点知っておくべきなのは、先述したように1939年9月に第2次世界大戦が始まるとバタイユは内的次元の体験と考察に耽るようになり、その成果を著作に立て続けに発表していったということである。つまり内的次元に深く沈潜したうえで、1949年の『蕩尽』は書かれ、また上梓されたということだ。じっさい、この書の最終章においてバタイユはマーシャル・プランについて長々と語った後、「自己意識」という内的次元へ話を転じる。「冷徹な明晰性が聖なるものの感情と合体する一点が露呈されねばならない」(バタイユ『蕩尽』第5部第2章第10節「富の最終的目的への意識と「自己意識」」)⁽⁸⁾と語って、「対立するものの一致」のテーマを内的次元で再吟味し、この書を締めくくる、いや開いたままにしておく。第3次世界大戦の回避のために、西欧の延命のために、人類の存続のために贈与を活用せよと提言するバタイユを相対化する思想の方向性がここに見えてくる。

5. 欺瞞の人類史、合理的思考の過誤

以上のことを知った上で、ポトラッチにおける贈与の曖昧さと矛盾を指摘するバタイユに目を向けてみよう。『蕩尽』第2部第2章「第8節《ポトラッチ》の理論 (5)：曖昧さと矛盾」の冒頭の言葉である。

「人間が保持する資源はある程度の量のエネルギーにすぎないのだが、人間は、そのエネルギーを成長の諸目的にいつも差し向けるということはできない。というのも人間の成長は無限ではないし、そもそも絶えず持続しているわけでもないからだ。人間は余剰を浪費しなければならない。しかし浪費しているときにすら獲得したいと貪欲に欲し続けている。浪費をも獲得の対象にしてしまうのだ。資源が蒸発してしまっても、資源を浪費した人が獲得した地位は存在し続けている。浪費はこれみよがしに行われるのだが、これは、この地位獲得の目的のためなのだ。他者たちに対する優越を得たいがためなのだ。この人は、資源を浪費して資源の有益性を否定しているのだが、しかしこの否定を浪費とは逆向きに、つまり有益に、活用しているのである。彼はこうして矛盾に陥っている。彼ばかりでなく、人間の実存そのものが全面的に矛盾に陥っている。人間はこうして曖昧さのなかに入って、そこに留まる。つまり人間は、財産の隷属的な使用に対する否定に価値、威光、生の真実を見出しているのに、同時にこの否定を隷属的に使用しているのである」(バタイユ、前掲書)⁽⁹⁾。

無益な贈与をめざしながら、その贈与を自分のために有益に活用する矛盾。内側から贈与を否定する不純な力が働いて、いつしか贈与を地位獲得のための手段に変えてしまう矛盾。バタイユはこの矛盾を北米インディアンだけの問題でなく、人間の本質的な問題と捉えている。片や、人類の歴史はそのような欺瞞の連続であるし、片や一個の人間の内的世界を覗けば、人間の知性の動きがこのような社会的地位の獲得のための贈与の活用と本質的に軌を一にするのが見てとれる。バタイユの考察は人類史と内面世界の二つに向けられる。

「こうした妥協が我々の本性のなかで生じている。ごまかし、間違い、罣、搾取、怒りの連鎖をもたらすのだ。そしてこの連鎖が、時代から時代へ、あからさまに理性の欠落した歴史を作りあげてきたのである。[……] 地位においては浪費による消失が名誉の獲得へ変えられてしまうのだが、さらにまた地位は、思考の対象を物へ還元する知性の活動に呼応してもいる。ポトラッチの矛盾は、歴史全体のなかだけでなく、より根源的に思考の活動の局面でも見てとれる」(バタイユ、前掲書)⁽¹⁰⁾

人間の思考は理性的であるはずである。その理性的な思考が無益であるはずの贈与を有益な地位獲得の活動に変える欺瞞を犯す。そして人類史をこうした欺瞞に満ちた非理性的な流れに作りあげてきたのである。何かが間違っているのだ。それは物を欲するという精神を相対化できていないところに発する。「考える私」を「考える物」とみなしたデカルトは近代西欧においてこの欺瞞の歴史の発端にいる哲学者だ。彼は、「考える私」を不動の物として確立し、「存在する私」すなわち身体を物のように立ち上げて、さらに自然界に対しても樹木や石のような個物だけでなく、水や土、空気といった曖昧に広がる物質に対しても、計測可能で掌握可能な物に変えて、人間の延命のために利用する近代文明に道を開いたのだ。

バタイユの見るところ、この西欧近代の宿痼を根本的には是正していかなば西欧は救われない。西欧と同一の発想に従うこの地上の近代文明も同様だ。バタイユに言わせれば、対象を物へ変えて延命に寄与させる思考のあり方それ自体を変えていかなばならない。少なくとも、そのような物体化する思考の彼方に存する非物体的な消費の現象、それに付随する心理の現象に対してはこの物体化する思考は抜本的な「変質」が必要になる。『蕩尽』第2部第2章「第8節《ポトラッチ》の理論(5)：曖昧さと矛盾」の末尾にはこうある。

「我々の認識作用は、対象を、従属的で操作されるがままになる事物へ還元してしまう。だからこの認識作用が解消してしまわないかぎり、我々は認識の究極の対象に到達することができない。知の最終的な問題は蕩尽の最終的な問題と同じである。だれも同時に認識することと破壊されずにいることを両立させることはできない。同様に、だれも同時に富の増加と蕩尽を同時にやっつけることはできない」(バタイユ、前掲書)⁽¹¹⁾

対立するものがそのままならば、対立する二つのものの分離は必然であり、両立は不可能になる。だが互いに「変質」することを諾なって、相手に身を開き、互いに相手を招来させるならば、対立するものはつながってくる。内的体験の媒介領域では、そのような「変質」による連結が生じている。上記の引用文と先ほど紹介した『蕩尽』最終章に記された言葉「冷徹な明晰性が聖なるものの感情と合体する一点が露呈されねばならない」は一見して矛盾しているが、しかし物を志向する認識の「変質」をバタイユは求めている。

6. 第三の道徳へ

じっさい、『蕩尽』第5部第2章第10節「富の最終的目的への意識と「自己意識」」には物を志向しない意識の動きが「自己意識」を真に出来させるとある。生産と蓄積のためにエネルギー資源の増加ばかりを考えず、「このエネルギーの増加は、この増加が純粋消費へ解消する瞬間との関係において位置付けられねばならない」としたあと、バタイユはこう主張する。

「とはいえこの純粋消費への解消はたしかに困難な移行ではある。じっさい意識はこの意向に反対する。というのも意識は、純粋消費の無ではなく、何らかの獲得できる対象を、つまり何らかの物を捉えようとするからだ。したがって重要なのは、意識が何らかの物への意識であることをやめる瞬間へ到達することなのである。言い換えれば、増加（何らかの物の獲得）が消費へ解消する一瞬間の決定的な意味を意識すること、これこそが、まさに自己意識なのである。つまりもはや対象として何ものも持たない意識なのである」（バタイユ、前掲書）⁽¹²⁾

このような純粋消費の無に向けて意識を開こうとするバタイユと、アメリカの余剰資産を西欧世界へ無償で贈与するマーシャルプランを支持して地球規模の延命を説くバタイユとは相矛盾する。だがバタイユはこの矛盾を肯定する新たな道徳観に立とうとしていた。

1957年に出版された文芸評論集『文学と悪』を紐解いてみよう。マルセル・ブルースト（1871-1922）に寄せた章が参考になる。真理への情熱をめぐって、若き日のブルーストと後年のブルーストとを比較検討した試みである。自伝小説『ジャン・サントウイユ』（1895-1899）から窺える20代のブルーストはとくに政治面で情熱的な正義派だった。社会主義者ジャン・ジョレスに共鳴し、ドレフュス事件（ユダヤ人将校ドレフュスがドイツへのスパイとして冤罪をかけられた事件）ではドレフュスの無罪を信じて疑わずにいたのだが、その後のブルースト、つまり1908年から長編小説『失われた時を求めて』を書き進める彼は一転して、虚偽に走っていく。この自伝的性格の濃厚な長編小説からは、最愛の母親をも騙して母親の嫌う同性愛に耽り、愛人にも嫉妬から嘘をつく作者の分身と思しき人物の不道徳が見えてくる。だが一見して矛盾するこの変化に対してバタイユは一貫性があると主張するのだ。若き日の正義への愛と、虚偽をちりばめた後年の生活との間においてブルーストは同一の情念に駆られていたというのである。

その点で、この章の半ばで引用される作家エマニュエル・ベルル（1892-1976）の感動的な回想に続けて語られるバタイユの文章は意義深い。パリ、オスマン通りにあるブルーストのアパートマンを訪れたベルルは、病弱なこの作家が人間の真理を自分に理解させようと、夜を徹して、とことん丁寧に、かつ明晰に語り続けたと伝え、若くて健康な自分の体力のなさ、知性の不足に心底嫌気を覚え、凄まじい形相で明け方の3時にオスマン通りを後にしたと綴る。どうやらこの時の話は男女の心の合一をもって至純の恋愛と考える若きベルルに対してブルーストは、不一致や行き違い、悲劇的顛末こそ愛の真実だとする持論を展開したらしいのだ。ともかくベルルの報告するブルーストの真理への情熱に続けて、バタイユはこう記す。

「この真理への貪欲さは、逆に、この貪欲さが仕える原理すなわち真理それ自体をもある一点で侵犯することにやぶさかではない。この貪欲さがあまりに偉大であるため、この原理は脅かされたりしない。逆にこの侵犯を躊躇したりするならば、そのことの方が弱さだとなってしまうのである。一個の美德の根底には、その美德の鎖を断ち切る力がある。我々はそうした力を持っている。伝統

的な道徳は、この道徳の密かな原動力を無視してきた。そのため、道徳の観念は精彩を欠いてしまった。つまり美德の側からすれば、道徳生活は臆病な順応主義のように見えてしまう。逆に道徳生活の側からすれば、精細のない道徳への軽蔑は非道徳とみなされてしまうのである」(バタイユ『文学と悪』『ブルースト』)⁽¹³⁾

こう述べるバタイユは三種類の道徳を念頭に置いている。一つは、キリスト教に発し近代西欧の家庭や教育の現場で教えられてきた伝統的な道徳だ。社会生活を送る上で共有されている道徳、すなわち個人と共同体の延命・発展に寄与する行為や考えを善とし、これを阻む行いや発想を悪として退ける道徳である。善と悪が分離され、善は正しく、悪は不正という価値づけが固定されている。第二の道徳はこの近代市民道徳に真っ向から対立して、悪を良きこと、善を悪しきこととみなし、ひたすら悪を推奨し悪事に耽り、善を愚弄する人の道徳である。サドの小説で主人公の悪漢や悪女によって具体的に提示されている。

第一の道徳も第二の道徳も、善と悪は分離し固定されている。善と悪どちらに加担するにせよ、善と悪の価値づけそれ自体に変化は生じない。片や善はいつまでもたっても良いこと。いや悪こそ永遠に良いことなのだともう片方の道徳は言い張る。バタイユはブルーストとともに第三の道を行く。今しがた引用した文に「真理への食欲さは、逆に、この食欲さが仕える原理すなわち真理それ自体をもある一点で侵犯することにやぶさかではない」、「一個の美德の根底には、その美德の鎖を断ち切る力がある。我々はそうした力を持っている」とあったことは重要だ。善のなかに善を否定する悪の力が内在するということである。そしてバタイユによれば、悪もまた善を欲し罰せられることを求めるというのだ。

「サドより巧妙なブルーストは、享樂することに食欲であり、悪徳に対して悪徳の憎むべき色合いを残しておいた。美德によって断罪されるという面を残しておいたのだ。しかしそうは言っても彼は、快樂を得るために有徳であったのではない。もともと彼は美德に達しようと欲していたのである。サドの小説の悪漢どもは、悪に関してその物質的な恩恵しか認識していない。たとえ彼らが他人の悪しき事態を欲していても、その悪しき事態は結局のところ彼らの自己本意な善でしかないのだ。相対立するものは互いの存在なしにはやっていけないのであって、そのつながりに気がつくのでなければ、我々は、悪が潜む混迷から抜け出ることはできない」(バタイユ、前掲書)⁽¹⁴⁾

この文章自体、悪を肯定しているのか、悪から出て行こうとしているのか、判然としない。むしろその両方なのだろう。そこにはバタイユがヘーゲル弁証法の重要概念「止揚(アウフヘーベン)」から学んだ曖昧さが影響していると思われる。既存の価値を維持しつつ、その束縛を解除するという曖昧さだ。「変質」とはこの束縛の解除をもたらし、異なるものとの結びつきを可能にして、メディア空間を出現させる。最後にヘーゲルのこの概念に対するバタイユの理解、それと関連する「媒介」(médiation)への彼の捉え方を確認しておこう。

7. 解除と維持, そしてメディア空間

バタイユは1957年出版の『エロティシズム』の中でこの書の鍵概念「侵犯」(transgression)について、それが「自然への回帰」ではないと注意している。人間の性の営みの特徴づける「侵犯」は、人間が自らに課した「禁止」を破って自然状態へ戻るという単純な話ではないというのだ。バタイユはヘーゲル弁証法の重要概念「止揚 (アウフヘーベン)」に想を得て、こう述べる。

「侵犯は《自然への回帰》ではない。侵犯は、禁止を排除することなく、解除する。そこにエロティシズムの原動力がある。同時に宗教の原動力もあるのだ」(バタイユ『エロティシズム』第1部第1章「内的体験におけるエロティシズム」)⁽¹⁵⁾

バタイユは1948年ごろに『宗教の理論』(未完の遺作)を執筆していて、そのなかでもこの侵犯の曖昧な規定を重視している。ただし侵犯ではなくその内実の「暴力」(violence)に対してであり、しかもこの暴力に「媒介」(médiation)の役割を見ている。相異なるもの、つまり人と神を結ぶ媒介である。ただしこの暴力と媒介に関してはもう少し詳しくバタイユの発言を見ていく必要がある。

まず前提として指摘しておくべきは、「暴力」と言ったとき、バタイユは単体(人間, 神)の存在内部で働く暴力と、外部から単体に襲いかかる暴力(犯罪, 侵略, 自然の猛威)の二つを分けて考えているということだ。外部からの暴力は無制限にその破壊力を発揮して単体を滅ぼしにかかる(これにもバタイユは媒介をもたらす強い働きを見る)。対して単体に内在して「媒介」となる暴力は人間の延命と繁栄を可能にする物の世界を完全には破壊せずに維持しておく。ヘーゲルのアウフヘーベン流に彼が言うところでは、後者の暴力は「物の秩序を解除しかつ維持する」。そして「媒介」はこう規定される。「媒介は、暴力と、暴力が引き裂く存在との合作なのだ」(バタイユ『宗教の理論』第2部第3章第2節「悪の媒介, および復讐神の非力」)⁽¹⁶⁾。暴力によって引き裂かれても単体の存在は維持されていくというのだ。

宗教の問題としても暴力はこの二つに分けて論じられる。そこにはどうやらユダヤ教とキリスト教、それぞれの根本に関わる事件がありそうなのだが、ともかくもまずは犯罪を裁く善の神の暴力である。彼言うところの復讐神つまり犯罪という理不尽な暴力に対して掟で復讐する善の神の暴力だ。「善の神が神的であるのは、暴力によって暴力を排除する限りでのことである(ただしこの神は、排除された暴力よりは神的ではない。この排除された暴力は善の神の神性にとって必要な媒介なのだ)。だがともかく善の神が神的であるのは、この神が善と理性に対立する限りのことなのである」(バタイユ, 前掲書)⁽¹⁷⁾。この発言の背景にあるのは、ユダヤ教の受けた悲劇とその後の新たな展開、つまりバビロン捕囚とそれとともに暴力的なまでに厳格化された律法主義、すなわち神からの命令として神との関係をよりいっそう緊密に結んでユダヤ人のアイデンティティを強力に確保しようとした律法主義の新たな展開である。

もう一つは、外部からの理不尽で全面的な暴力を受けて神（イエスが念頭に置かれている）が死する場合だが、その神が天上に登って、そこから暴力を発動し地上を裁くというあり方である。

「じっさい、道德神の供犠は、人々がふだん思い描くような深くて測りがたい神秘というわけではけっしてないのだ。役に立つものが供犠に処されたということなのであり、至高性もまた事物の次元に役立つように余儀なくされたときから、すでにもう、そうして至高性が物である限り、自らの破滅を通してしか神の次元に復せなくなっているのである。このことは、現実（身体的に）除去されうる一人の存在の中に神が存するという神の位置を前提にしている。暴力はこうして事物の次元を解除し、同時に維持している。復讐がそのあと続けてなされるかどうかは別にして、そうなのだ。天上の神は、現実の次元を転覆させる荒れ狂いという至高の真実を死において認めるのだが、この真実を自分の方へと差し向け、以後もはや神自体においては現実の次元に役立つことはなくなる。神は事物たちがそうであるように、現実の次元に隷属することをやめてしまうのだ。

こうして神は、維持と操作のための事物世界の諸原理の上へ至高の善を、さらには至高の理性を上昇させる。いやむしろこう言うべきかもしれない。神は、かつて超越性の動きがそうしていたように、これらの理解可能な諸形態を存在の理解不可能な彼方へ作り変えて、この彼方に内奥性を位置付けた、と」（バタイユ、前掲書）⁽¹⁸⁾

「内奥性」とは存在相互の内的な交わりのことである。神の子イエスが地上で処刑されたのち、天上の神はこの暴力の地からイエスを天上へ引き上げ、そこで人間との親密な関係が成立するようにしたというのだ。だが果たしてそのような神の国は存在するのだろうか。地上の暴力の世界こそが「内奥性」の出現する場なのではあるまいか。そして地上でのその交わりは暴力こそが可能にしているのではあるまいか。二つの暴力があるとして、地上で生きる人間の世界を維持しまた解除するという曖昧な暴力は、隷属的な面を持ちはするが、しかし、人間一人一人が「内奥性」に入って至高の交わりを生きうる可能性の鍵を握っているのではあるまいか。たとえ一瞬のことであり、持続しないのかもしれないが、貴重なメディア空間を生きる可能性を与えるのではあるまいか。

結びに代えて

以上、様々なテーマに立ち寄ってきたが、ここで大筋に沿って問題を整理しておこう。

贈与とメディア空間の出現を追いかけてきたのだった。このメディア空間を物の次元と心の次元に分けて捉え、贈与物よりなる物的な次元（外的次元）とともに、当事者の心の次元（外的次元）を重視し、そこに暴力の働きを見てきた。この暴力は当事者の外部や内部から理不尽に贈られてくる。贈与物以前に、まず暴力の贈与がある。これは偶然性の問題に関係し、バタイユに即して言えば、「好運」（la chance）のテーマと関わる。そこで重要になってくるのは、人の世界を簡単に滅ぼしてしまうような

暴力の贈与を果たして人は「好運」として受け止めることができるのかという問題である。稿を改めてこの問題に取り組みたいと思う。「運命愛」に関わってくる問題だ。

本稿では贈与物に暴力が宿り、その暴力を功利的に活用することの是非を道德の視点から検討してみた。無益で非利己的な贈与を至純とすれば、自分や自分の共同体の存続のためにあるいは地位向上や発展のために贈与を活用することは不純であり、欺瞞である。バタイユ自身、この矛盾を『呪われた部分』で犯していることを確認した。しかしこの矛盾は、彼において「対立物の一致」、それを可能にする「変質」の操作あるいは動き、さらに三種の道德、物の次元の「解除と維持」の曖昧さといった問題と関わってくることを見てきた。

ひとまず結論として、ここでは次のように述べておきたい。バタイユは不純な贈与であれ、これを肯定し、内的なメディア空間の出現を期待していた、と。ただしその際、贈与物、さらに贈与関係者の「変質」が重要な条件になってくる。これはバタイユにおいて「好運」および「至高の操作」(l'opération souveraine)につながる条件である。つまり「変質」の可能性はどの限り偶発的であり、どの限り人為的であるのか、という問題である。バタイユのメディアの思想は、「好運」と「至高性」の問題群に広がっている。そしてそのそれぞれの奥に芸術の星雲が広がっている。さらに考察を進めていきたいと思う。

《注》

- (1) *Les Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome II*, Gallimard, 1972, p. 311 (以下、OCII 311 のように略記する)
- (2) OCII 319.
- (3) 別の拙稿では第3部「刑苦の前歴」に収められた1940年春執筆のテキスト「交わり」に注目して、彼の内的世界の限界線上での意識の「横滑り」と限界領域のメディア的性格について論じた。酒井健「ジョルジュ・バタイユの内的体験と媒介の思想——「非—知の夜」の沼地から」、『言語と文化』(法政大学言語・文化センター発行)、第18号、2021年1月刊行を参照のこと。
- (4) OCI 309.
- (5) OCI 310.
- (6) 「消費の概念」の冒頭にはバタイユのそのような動機が語られている。引用しておこう。
「有用なという言葉の根本的な価値が議論のゆくえを決定しているときにはいつでも、つまり人間社会の生活に関わる本質的な問題が取りざたされるときにはいつでも、発言者が誰であれ、また表明される意見がどのようなものであれ、その議論は必然的に間違っており、根本の問題が回避されていると言い切ってよい。じっさい現代人の考え方は、全体を見渡してみると、程度の差こそあれ多様であって、人間にとって何が有用なのかを決定するための正確な手段が欠落している。この欠落を十分に示す事実がある。すなわち我々は、有用なものと快楽の彼岸に位置づけようとする原理を、たとえば名誉とか義務などの原理を、この上なく不当な仕方であらう援用せざるをえない、つねにそうせざるをえないという事実である。名誉や義務の原理は、金銭的な利害関係の調節のなかで偽善的に使用されているのだ。」(バタイユ「消費の概念」OCI 302)
- (7) 酒井健「ジョルジュ・バタイユと媒介の思想 (1)——シュルレアリスムと「対立物の一致」をめぐる」、『法政大学文学部紀要』第81号、2020年9月発行。
- (8) OCVII 178.
- (9) OCVII 75.

- (10) *OCVII* 76.
- (11) *Ibid.*
- (12) *OCVII* 178.
- (13) *OCIX* 262.
- (14) *OCIX* 268.
- (15) *OCX* 39
- (16) *OCVII* 332.
- (17) *OCVII* 331.
- (18) *OCVII* 332-333.

Georges Bataille et la pensée du moyen terme (2) — autour du don et de la morale

SAKAI Takeshi

Abstract

Cet article constitue la deuxième partie d'une série d'études qui s'intitule intégralement « Georges Bataille et la pensée du moyen terme ». Pour aborder ce sujet d'ensemble, on choisit dans le présent essai les perspectives du don et de la morale. C'est parce que le don permet la médiation et la communication, soit sur le plan extérieur des objets donnés, soit sur le plan intérieur de la psychologie du donateur et du donataire. Les notions batailliennes de « dépense » et de « consommation » expliquent bien ce rapport excessif de communication qui s'accomplit par-delà l'échange commercial normal; celui-ci s'effectue en effet de façon raisonnable, sans faire apparaître aucune communication affective ou émotionnelle entre l'acheteur et le vendeur.

Et cependant, le don reste le plus souvent dans une dépense impure; il ne cesse d'être imprégné de l'intérêt chez le donateur, voire chez le donataire. Bataille lui-même commet cette contradiction notamment dans *La Part maudite, essai d'économie générale; la consommation* (1949). Tout en y appréciant le plan Marshall comme un don gratuit, il s'attend en même temps à ce que cette dépense de l'Amérique apporte l'élévation du niveau de vie dans les pays occidentaux ainsi que l'évitement de la troisième guerre mondiale.

Mais il s'agit là d'un aspect nouveau de l'éthique chez Bataille, ce que cet article met en évidence en s'arrêtant sur sa conception de la troisième morale, telle qu'elle est exposée dans le chapitre « Proust » de *La Littérature et le Mal* (1957). Inspiré par l'ambiguïté de l'*Aufheben*, idée hégélienne qui consiste à lever et à maintenir l'opposition, Bataille pense à l'« altération » des deux termes opposés; altération qu'entraîne la « violence » et qui permet la médiation. Mais dans quelle mesure Bataille accepte-t-il l'intervention de cette force irraisonnée ? Sur cette question essentielle, notre présent essai reste ouvert, mais c'est pour la reprendre dans un autre texte, avec ses idées de la « chance » et de la « souveraineté ».